

平成一四年二月一七日、父が興した会社が倒産した。

時間から時間まで働けばいいと思っっている職人、父のワンマンでは管理が行き届かなくなってしまった組織、いつボタンをかけ違えてしまったのだろうか？社員や協力会社のために、身を削り仕事をしてきた父、皆の望む方向とは逆へと会社は進んでしまった。

私は父の会社に入社したのは平成一二年四月。取引先で四年間、現場事務を経験したものの、鉄筋に関する知識は一切なく、右も左もわからなかった。

そんな私に、父は知識や技術を押し付けるようなことを一切しなかった。私が会社のために必要と思うことを自由に考え、実行させてくれた。

しかしながら、私が入社して一年を過ぎたころ、資金が全く回らなくなった。返済のために新たな融資を受けるという自転車操業に陥った。

そんな時、民事再生という言葉が頭をよぎった。そうすれば、何とかなるかもしれない。

しかし、考えが浅かった。誰にも迷惑をかけず、再生ができるわけではなかった。民事再生とは協力会社らの犠牲の上に成立するもの、私たちは破産の決断をした。

社内の資産だけでなく、父母の全資産を現金化し、全社員・全協力会社

の支払に当てた。そして、会社は破産した。

破産の一報を聞きつけ、ゼネコン各社が材料を差し押さえに押し寄せた。私たちは、それらは管財人のものであることを伝え、必死に謝り続けた。

事務所に戻ったのは、二二時を過ぎたころだった。父と私、そして数々の社員、深く息をついた。しばらくすると、一枚のFAXが届いた。

「工藤工業(株) 社長様 今まで我ら若輩者にお力添えをありがとうございます。ありがとうございました。これからも大変な日々が続くと思いますが、又、いつの日か、今度は恩返しが出来る日が来ることを待ち望んでいます。寒さも厳しくなりますが、お体に気をつけて頑張ってください。」

会社の倒産で、一番被害を被ったゼネコンの社員さんからの、心温まるFAXだった。日頃から、お客様をはじめ、誰に対しても、いやな顔一つせずに笑顔で接していた父だからこそ、このようなFAXが来たのだろう。

この数日後、私は社員とともに新たな会社を立ち上げた。恐怖と重責に打ち勝ち、父の無念さを晴らすために。私が一步前に進むことができたのも、このFAXがあったからです。

